

宇宙における文系 —「文系の有人宇宙開発」を読んで—

時岡 新

社会科学系技官

映画『アポロ13』がたくみに描くチーム・ワークの妙を思いだした。設備や空間の制約、かぎられた時間のなかで、彼らには何ができるのか。くわだてのすべてを支えたのは、人と人との関係、信頼と協同である。

井上氏はISSにおける長期滞在型のミッションを紹介してくださったが、宇宙心理学の守備範囲はいっそう広いものと想像する。よく知られている『宇宙からの帰還』や秋山豊寛の著書などによれば、訓練期間中や選抜の機会、また搭乗後も生涯にわたって、飛行士たちの心はゆれ動きつづけるのだという。短時間で処理すべきアクシデントへの対応、数か月におよぶ閉鎖環境での作業、はるかに長いその後の生活、それら全てにかかわって宇宙心理学があるのだと思う。なんとも魅力的な研究領域である。

宇宙生活を困難にする要因として、下界から隔絶した環境での生活、さまざま

な国籍や文化出身のメンバーで共同作業をすることの二つがあげられている。これにより引き起こされる心理的な問題点は不安、うつ状態、イライラ感、攻撃的行動、モティベーションの低下など。これに対処するため、異文化メンバーへの適応や、対人関係を良好に保つ訓練があるという。注目すべきは搭乗期間中に地上から実施される心理的支援で、地表との隔絶感や孤独感を減らすためのものである。観測や実験の成否は心理的なテクニックによっており、人のこころ、人と人との関係に対する目配りなしにはあり得ない。

危機への対応はチームの実情をはつきり示すだろうけれど、それでは遅すぎる場合もある。アポロの生還は周到がもたらした幸運というべきだろう。ヒューストンの支援もまた、なすべき諸事の総動員にすぎない。感動的なのは、瞬時の判断と即行を可能にした、人びとの深いつながりである。長期にわたるミッションでは、それが心理的な安定の礎となるにちがいない。こう考えてみると、宇宙開発に文系がかかわるのはあまりに当然のことである。

わたしたちが乗りこむ大きなふね、その行方がいっそう気にかかる。

(ときおかあらた 社会学)